

令和5年度 第1回三島市文化振興審議会 会議録

1 開催日時

令和5年10月16日（月）午後1時30分～午後3時45分

2 開催場所

三島市役所大社町別館 1階 防災研修室

3 出席者

(1) 委員…9人／12人中

平野雅彦委員、坪井則子委員、橋本由紀子委員、坂田芳乃委員、靱山好実委員、三室隆委員、杉山朋子委員、山形真由美委員、小澤和久委員

（欠席：岩下晶子委員、宮西達也委員、井島真知委員）

(2) 事務局…4名

西川産業文化部長、加藤文化振興課長、菊池文化振興係長、鈴木副主任

4 会議の公開・非公開

公開

5 傍聴人の人数

0人

【議事録要旨】

1 井口副市長挨拶

2 議事

—これより会長による議事進行—

(1) 三島市文化振興基本計画の進捗状況について

(2) 令和4年度文化振興事業について

(3) 令和5年度文化振興事業について

資料(1～20 ページ)に基づき事務局(菊池係長)から説明があった後、次のような意見交換及び質疑応答がされた。

委員：ありがとうございました。それでは、委員の皆様からただいまの事務局の説明について、ご意見・ご質問またはご助言等ありましたらお願いいたします。

委員：もしかしたら以前も質問をしてるかもしれないが、1頁の2の1「子どもの文化芸術体験の充実が重要と考える人の割合」の後期計画目標が40.0%となっているが、(文化振興基本計画の)数値目標1「子どもの文化芸術体験の充実が重要と考える人の割合」の当初目標は93%となっていたが、な

かなか現実的ではなかったのか、後期計画目標が 40%となった理由を、どうしてそうなったか理由を知りたい。また、2の「日常生活の中で文化が重要と考える人の割合」が9割以上ある中で、「子どもが文化芸術体験をすることが重要と考える人の割合」は令和2年はわずか30%となっているのは、ちょっと数字的にも変かなと感じる。背景やアンケートの質問の内容が伝わりにくかったのか、1は文化芸術となっているが、2は文化となっている。文化になると歴史も食も生活文化もあるということで幅広い解釈の中で、文化芸術と文化を分けてしまったのではないか。実際には、もう少し多くの大人が期待しているのではないかと考えるがどう考えているか。

事務局：1つ目「子どもの文化芸術体験の充実が重要と考える人の割合」の当初目標が93%に対し、後期が40%と見直されたということについてはある程度現実的な数字を目標にしたのではないか。現状値から踏まえて、到達することが可能な数値としたのではないか。また、項目を文化芸術と文化としたことによって皆さんの捉え方が違くなってしまったのかなということが想像できる。

委員：具体的なことは把握されていないということですね。

委員：確かに行政の側からいくと、目標値をクリアすることが大切だと思う。文化芸術に多くの方が関心を持つ、文化は人間が生きていくための基本であり、そこが半分以下でいいかということは私としてはどうかと思う。これは達することができなくても目標値を高いところに持っておいて、行政の施策等でどれくらいがんばるかというところで、徐々に上げていくことが大切なのではないかを感じる。

もう一つは、「子どもの文化芸術の体験」というのは、この事業を見ると、幼稚園、保育園、小学校、中学校でかなりやっている。が、学校の中でやっている文化芸術の体験が保護者に伝わっていないのかなと感じる。教育サイドの情報発信として何かいいアイデアがないか。

事務局：次期計画の際にはこの目標値を十分に熟慮した上で設定を定めていきたい。

委員：それこそ県の文化振興の施策においても先ほど副市長がおっしゃられた通り、県では平成18年度に条例を作って19年度に文化振興計画を策定し、市町では三島市が追随してきており、大変ありがたい。今、県では第5期の計画期間となり、先ほど紹介のあったSPACやアーツカウンシルしずおか、子どもの関係の3本が県の計画では重要施策となっている。資料の中に東アジアの資料もあると思うが、先程の文化芸術と文化というお話があ

ったとおり、県の東アジア文化都市の事業については、文化芸術だけでなく、広く文化というくくりでやっていこうとなった。これまで東アジア文化都市の取組は10年目となり、コロナで開催しない時もあったため静岡県は9都市目となっている。どちらかという、狭い範囲での文化芸術として取組を進めましようとなっていたが、それだと一部の人だけが関わっている感じ、芸術が入ることによって私たちには関係ないという人がでてくる。そうではなくて、スポーツだって文化であり、食文化、生活文化など文化を広く捉えることによって、日本を東アジアそして、世界に発信することが大事だという観点で取り組んでいる。文化のセクションにいると文化の香りがする人などと特別視されることがあるが決してそうではない。誰しものが文化なしでは生きられない、背負っているものがある。そういった中で大事にしたいことを認識したり、発信したりすることで係わりを持たれていると思う。数値目標も文化を狭く捉えるのか広く捉えるのか整理することによって、少し、数字の関係も良くなると思う。

委員：ありがとうございます。いずれにしても、この文言については精査して、検討していく必要がある。アンケートの設問によって大きく数字が変わっていくということを私も研究している。その辺りも少し慎重になって見直しをする必要がある。40%の目標設定についても、私たちになくってはならない文化ということで、この数値をどのあたりに定めていくのかということも議論になってくると思う。

委員：先ほど学校等での広報について話があったと思うが、三島市の小中学校は、学校ごとのブログが整っており子どもたちについて情報発信している。また、このような催しの日をうまく参観日に合わせることで保護者や地域の方へ、子どもの文化芸術体験が実際にどのような形で行われているか知っていただく機会になればと思う。今後は、こういった数値も考慮しながら学校もやっていきたい。

委員：2の日常生活の中で文化が重要と考える人の割合数値は理想論というかそう生きたい、自分の人生はそうありたいと思っている数字だと思う。一方、子どもの文化芸術体験の充実が重要と考えるということ、お金の問題、時間の問題含め、自分の子どもや学校とか生活圏の中でなにをさせられるのか、いきなり現実におとされるのではないか。むしろ、この二つを聞くことは、現実が分かっている設問ではないか。1の項目を目標値にあげて、よりそこに近づけたいと思うのであれば、よりその具体的性あげていく必要がある。2は言うだけならただ。言ったら100%になる。1の項目を重点とする

ながら、具体的に体験を充実できるシステムを市全体として作るというの
がいいのではと漠然とだが思う。

委員：問いのトーンが違っているためこういう数値がでてくると思う。繰り返し
になるが、数値の見直し、文言の見直しの際には、この委員会へも諮って
いきながら設定していきたいと思う。

委員：文化をどうとらえるかだと思う。自分はずっとクラシック音楽をやってき
たため、文化というと演奏とか絵画などそういったものがイメージされる。
今の子どもたちや日本の世界に誇られる文化というとアニメだったりプ
ログラミング的なものだったり、少し新しいジャンルが増えてきていると
思う。今小学校の中にもプログラミングが必須になっていき、教科になる。
プログラミングの中にクリエイティブのこともあり、楽器を使って音楽を
作曲したり、3Dのアートで作品を作成したりということもある。子ども達
の捉える文化というのは、そういったものも含まれてくるのではないかと
思う。私たちが経験したことのない文化的な価値を持っているのではないかと
思う。今の説明を聞くとそちらの方面の事業がない。ただ、それを文化事業
に組み込むべきなのか、否か、悩ましいと感じている。

委員：子どもの文化芸術体験の充実が重要と考える人の割合の子どもの範囲は。
幼稚園、小学校、中学校くらいまでか。

委員：違うかもしれないが、学校サイドとしては、園児、児童、生徒とつく範囲
までかなとは思っている。

事務局：このアンケートを取る際に、文化とは何かということと同様に、子どもの
範囲をはっきりと示してはならず、答える方の捉え方によって変わってし
まっている。そういったところが数字が低くなってしまう原因にもなっ
ていると思う。

委員：あえて文化を定義づけすると、ある程度、共通の価値観を共有できる社会
での生活様式の総称という説明もあったりもするので、先ほどから議論に
あるように、あまり生活と切り離されたものではなくて、本来は生活の中
にある一つの型。

13 番の絵本のまち三島とあるが、絵本は子どもが中心ととらえがちだが、
子どもから大人まで楽しめる。あえてヨーロッパでの話をすると例えばル
ーブル美術館に子供を連れていくとそこで座って絵画の説明を受けると
いうことが普通に行われていたり、どんな経済状況の人でも芸術に触れら
れるような、無料で芸術を楽しめる日というものが国レベルで行われてい
たりしている。また、こういったことを自治体レベルで、もし財政が許せ

ば、行えることがあれば、いわゆる生活の中に文化を取り入れる一つのアピールポイントになるかもしれない。それと同時に子どもということを経くらずに大人と同じものを見せるということも一つのやり方かなと感じる。

委員：このアンケートに答える親世代が子どもといわれる世代とギャップがあるのではと感じる。私の世代のサブカルチャーが今はむしろメインカルチャーの方に移行している。アニメ・ゲームのようなものがむしろ社会の中でメインカルチャーの方に入ってきたりしている。eスポーツというものは高校の部活動の中に取り入れられていたり、あるいは、オリンピックの種目になるんじゃないかともいわれている。そのあたりのギャップがあったりして、どういうふうに問いかけるのかという、そのあたりの事例の出し方なんかもアンケートを行う際に重要ではないか。こういった流れの中で、もちろん三島は三島の中で独自の文化の捉え方が大事だと思うが、せっかく委員の皆さんが事例を紹介いただいたので、そういったところにも目を配って、常に最新の情報を取り入れていくという場でもあるのかなと思う。

委員：資料を見て、三島市の子ども達は幸せだなと思いながら見せてもらっていた。実施することに意義がある、実施し続けることに意義があるものもある。数字だけだと分からないところもあるが、例えば、解りやすいものだと、HPに掲載しましたというところは、それで？とってしまうところまで。三島市の立ち位置としては、どこまで関わるのが立ち位置なのか分からないが、このHPを見て来てくれた方がどの位いたのか、とか。事業を広報掲載しました、HP掲載しました、それで、市として終わり、ではなくて、その情報が届いてなくて知らないから動かないという人もいると思う。そこの今風の発信の努力、お金をかけずに波を起こすことはいろいろできると思うので、それも見えてくるといい。主催者とのやり取りでどこまで市が口出しできるかどうかはわからないが、待っているだけじゃないというか、積極的な発信についてもここから見えてくるといい。

委員：特に広報の問題でしょうか。

委員：そうです。フィードバックできるもの。やりました。で終わってしまっているの、どうだったの。効果あったの。という疑問がある。そして、これを自分が会社でやったら突っ込まれてしまう。

委員：本日の資料の中ではそこまでご用意いただけなかったのではないか。当然事業を一つ一つやっていくと必ず振り返りがあり、それを共有する場が必ずある。

事務局：委員のおっしゃるとおり発信して、こちらが伝えたつもりで終わりとなってしまうとどう届いて、どう活かされているのかわからない。なるべく市民の意見を聞くというところが市の姿勢でもあるため、そういった検証の仕方をしていくことが大切。情報の積極的な発信というところでもっと効果的な、かつお金のかからない、広く多くの方に情報を伝えられる方法を研究していく。また委員の皆様でこういう方法があるというご意見があれば教えていただきたい。

委員：三島市だけでやろうとするととても大変になる。市民を巻き込む形がいいのでは。

事務局：現在、DXが推進されているため、その辺りをうまく活用していく必要がある。例えば、SNSで発信した時にカウンター数をきちんと把握しておくとか、来たお客さんに対し電子媒体でアンケートを実施し、その際に何を見て来られましたか。という設問で聞くのも一つの効果検証になると思う。他課においてもDXを使った事例があるので研究していく。

委員：おそらく、各自の事業で振り返りはされていると思う。その出てきたデータに対し、きちんと読み込むということが不足しているのかなと感じる。そのデータを見て次にどう進めなければいけないのかという分析ですね。そのあたりを改めて研究する必要があるのでは。

委員：様々な事業を実施されているが、それぞれの事業のアンケートを実施されているか。

事務局：実施しているものもある。2のSPACおはなし劇場は幼稚園、保育園へアンケートを実施し、12のせせらぎ音楽祭、9のSAPC「先生のための創作・表現スキルアップ講座」、18の「ストリートに音楽がきこえるまち」、23の三島市美術展、30市制80周年記念事業についてもアンケートを実施している。

委員：その結果を次に生かしたり、結果を公表したりということはしているか。その結果をどうされているのか。

事務局：次年度の開催にあたって、アンケートでいただいた意見を反映したりしているが、公表については実施していない。

委員：アンケートでこういう声がありましたというようなことを公表したりして、それがいい宣伝になることを聞くので、参考にさせていただければ。

委員：企業とかがあえてクレーム等を前面に出しながら、そのクレームに対してこういうふうに努力します、というようなことを最近よくされている。スーパーマーケットでもお客様の声をあえて貼りだして、それに対して、

お店側のマネージャーなどが答えていく。いわゆる見える化。それによってお互いの意思の疎通を図っていく。それがネットで行われる場合もあるし、掲示という形で行われる場合もある。見える化ということが必要かもしれない。

委員：15の三島の文化応援プロジェクト企業インタビューは、いろんな企業の代表の方や団体の代表の方にインタビューを行っていると思う。これはアナログだと思うが、こういう方達に三島の文化事業をお伝えするような機会や懇談をする機会があるということが大切。こういった方達は影響力の多い方。こういう人たちにインタビューをするだけで終わらないように、この人たちを何か活用する方法を考えるといい。全てが先端的な広報だけでなくでもいいのでは。この事業はいい事業だと思うので、何か工夫されたい。

委員：1のブックスタート・セカンドブック事業について、先ほどから文化とは何かという話があるが、文化のスタートは本と出会うということが大切だと思う。自分の体験からしても本との出会いは印象深い。小さいころに本に出会うことが大切、ブックスタート・セカンドブックが何歳であるかということは解らないが、現在は、図書館の職員とボランティアさんがやっているということで、これはこれで、コンスタントにやっていくといいと思う。絵本作家からインタビューをしているということがあるが、コンスタントにやることとイベント的に本に出会う事業をコラボしてやることによって、より本に出会えるのでは。やはり、本との出会いは、図書館と出会うということがよい。図書館にはこんなに本があって、ここには自分が読みたい本があるとか、またプレゼントされた本と同じような本があるということで、子どもたちが足しげく図書館に通うような環境を作ることが大切。点的にはこういう事業があるので、もう少し面にするとか。障害のある子が本にどうやって出会うかとかそういったところにSPACが入ってくるといいのでは。活動の中で本に出会うことに繋がるのでは。県立美術館で一度、宮沢賢治のセロ弾きのゴーシュをチェロリストとSPACの俳優が来て、動きながら読む(動読)をやったことがある。子どもから高齢者まで美術館が埋まるくらいの人きた。本との出会いもただ朗読するだけでなく、いろんな方法があると思う。この事業はいい事業なので、是非、形が大きくなるよう進めてほしい。

委員：ブックスタート、セカンドブック事業は、三島でやっているということをもっと全国へ宣伝したらいいと思うくらいの事業。少しうろ覚えだが、フ

インランドで、学校図書館とどこかを自由に回るバス（交通手段）があって、子どもがタダで利用できる。学校の授業などで、自分が何か知りたかったらそのまま行くことができる。足が必要な距離でもそれを使っていくことができる。そして、図書館からもまた行くことができる。そういうルートを用意しているということを知ったことがある。三島は、子どもは先ほどの人口でいうと1割位おそらく1万人弱位。そんなに大人数を対象としている話ではない。そういうルートを作るといっても三島位の少しコンパクトな街であればできるのではないかと感じた。

委員：この後、絵本のまち三島についてご説明いただくが、ブックスタート・セカンドブックについて折角図書館長がお出でになるので、この件について、補足があればお願いします。

館長：ブックスタートは4か月検診時に図書館司書が保健センターへ出向いて、ボランティアの方と一緒に実施しているが、離乳食講習会の中で実施しているため、時間が大変短い中でやっている。参加者1組に対し、15分程の限られた時間ではあるが、効果があると感じている。読み聞かせをすることにより子どもの表情が明るくなる気がする。セカンドブック事業は、2歳児の健康相談会時にやっている。図書館としても大切な事業。小さい時から絵本にふれてもらういい機会である。続けていきたい。

事務局：図書館では、毎週水曜日にお話し会を実施している。また、ジンタ号という本を乗せたバスが市内35か所を巡回しており、図書室にないような本を借りることができるようになっている。

委員：音楽を教えているとお兄ちゃん、お姉ちゃんのレッスンについてきた下のお子さんの方が音楽的素養が高いと感じる。ただ、比べて根気がない。私自身の話だが、子どものころに祖父の部屋に大人向けの美術全集があり、大好きだった。図書館も児童図書は子どもの本しかなく、美術全集は大人の美術のコーナーにしかない。子どもにフリーで出せるような美術全集があって、見られるようにするとか。やはり幼いころから本物に触れる機会が大切だと思う。読み聞かせは大変いい。子どもが大人の声を聞くのも大切だが、それとは別に、子どもが一人で積極的に本物を見る機会も大切。

委員：皆さんの意見から、いかに小さい頃からの読書体験、子どもたちの発想を広げていく、価値観の多様性を生んでいくかというようなことが大切だと感じた。最近では、図書館と美術館が同じ建物内にある図書館のようなものも生まれている。ある作品を見ながら、それについてすぐに調べられるとかそんな機能的に生まれている。いずれにしても図書館の内容について

話す場ではないかもしれないが、その重要性については、委員の皆さんから文化、文化芸術を作っていくものとして図書館は地域において、非常に重要な役割担う文化施設である。2027年静岡に県立中央図書館が新設される。新しく生まれる県立中央図書館と市町の図書館がどういうふうに連携していったらいいのか。これから議論が深まっていくのでは。そこに文化芸術またはアートというものがシームレスに関わっていくかということがきっとこれから議論としてされるものと感じている。

委員：中央図書館の話ですと進行が遅れているという話があるが、令和10年度から開館をとということで作業が進められている。このあと、絵本の話があると思うが、たまたま伊豆半島が文学で一つだよという伊豆文学祭が伊豆の国市で昨日、一昨日と開催された。前橋の文学館の館長が萩原朔太郎さんの孫がいらしていた。変わらないために変わらなきゃいけないということが大切だよねということをおっしゃられていた。文化政策で仕事をしていると、文化とは長く続くということで継承していくことが大事だよねということだが、現在はコスパだったり、短期的に効果を上げなければいけないんだけど、変わらないということの大切さを認識しながら、でも変わらないといけないよね。文学館というのは、文豪の机を置いて、手書きの原稿を並べたところで、マニアならわかるが、それ以外の方にとっては何も出てこないですよという話をされていた。むしろ、三島の大岡信さんを顕彰していくんだということで、詩を掲載しているが、そういったものを学校なりに掲示して毎日詩を見るとか、あるいはその詩を覚えるとか、言葉のフレーズで救われる何かがあるのだとしたらそういったものをだしていくべきじゃないかとおっしゃられて、なるほどと思った。ヨーロッパとかへ行くと建物に詩が刻んであるということがあった。その言葉で何か伝えようとしているものがあるけれども、日本だと、スローガンのようなものしか載ってなくて。美しい言葉の詩であるとかが日頃目にするところにあるといいのでは。言葉を大切にすま三島っていいのかなと思う。伊豆文学の関係でいくと熱海から入るルートと下田から入るルート、三島修善寺から入るルートの3つがあるといわれた。まさに文学に入るルートの一つが三島なんだなと言葉を大切にす三島がいいなと思う。

それと、広報、相談窓口があって15件 カスタマーサティスファクションではないが、もっともっとアピールするといい。委員がお子さんからシニアまでという話をされたが、県の文化事業もシニアの方が多い。シニアの方が多いことをあまり見ないまま子どもの話をするということが多い。こ

れから課題となってくるのは、地域部活の関係などもある。世代間の差がなくなるといいのかな。国際交流事業の中止、言葉の話で言ったときに外国の方だからわからなくていいよね。ではなくて、外国の方だからこそきれいな日本語を三島で覚えましたというようになるといいのかな。文化振興課担当できるかどうかわからないが、多文化行政、文化で理解し合える場を作っていくということができるのいいと思う。

委員：街の中にそういった言葉ある。というところで、初めて三島に来た時に水辺の文学散歩道を通った。一つ一つの碑を外国人の方が写真を撮ったりしていた。全部いいが特に太宰治の言葉が特にいい。三島ってそういうところなんだとひどく感銘をうけた記憶がある。言葉の力のすごさを改めて思い出した。

委員：有事の際にいろんな先人たちの進言を集めた本が大量に世の中に出ていく。いかに私たちは有事の際に言葉というものに救われていくかということが分かる。そのためには、日常からのストックが必要と感じる。

委員：言葉とはずれるかもしれないが、ヨーロッパの図書館に視察に行ったことがあるが、ヨーロッパの図書館は中に防音室があってピアノが置いてある。図書館には楽譜があるので、その楽譜を見て音を出してみたい時にすぐに演奏できる。日本にはそういった図書館がない。図書館のジャンル分けされている。言葉のジャンル、アートのジャンルや音楽のジャンルなど切り離して考える風潮が日本はある。図書館はすべて総合的網羅されている場所だと思う。オールジャンルができるといい。新しくできる図書館に期待している。

事務局：生涯学習センター1階でロビーコンサートが開催されている。防音とまではいかないが、図書館の前で音楽が奏でられている環境がある。

委員：ニューヨーク公共図書館という映画があるが、これを見ると図書館という場所はいかに多様な場所かということがよくわかる。各部署、図書館の拡張性、我々の考える図書館をはるかに超える図書館がある。

(4) その他

絵本のまち三島推進事業について

資料(16～17 ページ)に基づき事務局及び図書館長から説明があった後、次のような意見交換及び質疑応答がされた。

委員：令和6年度の事業予定は決まっているか。

事務局：現在既に行っている各課の事業や文化振興課が行っている事業については引き続き行う予定。また、来年度新規に行う予定の事業については、予算要求をしていく。具体的には、資料の2ブックスタート・セカンドブック事業、3のおはなし劇場、7クリエイティブワークショップ宮西達也先生の読み聞かせは先生の都合により未確定、このほか図書館においてお話し会や図書館司書による幼稚園・保育園での絵本の読み聞かせを実施する予定です。

また、佐野美術館では、毎年絵本原画展を開催されているので、今後もご協力いただきたい。

委員：絵本のまちとして、外から人が来て三島を回ってもらうということをイメージされているとのことだが、そういったことで成功している事例はあるか。

事務局：和歌山県の有田川町があり、10年以上前から絵本のまちとしている。廃線になった駅舎を絵本作家がペインティングしたり、街中にまちかど絵本箱を設置し、誰でも自由に絵本を借りることができるが、不思議と本がなくなるということ。11月を絵本月間として、絵本作家さんたちと絵本に関するイベントを昨年度まで開催していた。

委員：絵本のまちのイメージが、この絵は素敵だが、具体的に湧きにくい可能性があるのでは、これからスタートするところでしょうかから具体性があると市民の協力が得られやすい。町全体を三島を絵本のまちとして認識してもらうためにイメージを作られた方がいいと思う。その点でこの絵はいいと思う。こういうものを見てみんなが考えると思う。図書館にこの絵を飾ってもいいのでは。広報に使えると思う。

委員：この絵はとてもイメージが湧きやすい。

委員：隠れキャラだったり、塗り絵教室もできそう。

委員：企業や商業施設が入っているがどういうふうにするのかなと思っていた。この屏風を見ると、絵本作家のペイントや商店街に街角ギャラリーだったりがあるってなるほどと思った。お店も新しくして2階に絵を飾れるギャラリーがあるのでぜひご利用を。これを持って商店街を回られるとよく解る。説得力がある。

委員：この絵の中で、感動したのが「ぐりとぐら」のカステラを作るところ。フランスに住んでいたころ、美術館と地域のレストラン・飲食店がコラボして、美術館内に展示されている絵からインスピレーションを得て、飲食

店のシェフがおつまみやお菓子を作って、展示会でシェフの話を聞きながら飲食するという料理と美術のコラボという企画を1週間程度やっていた。絵本のモチーフを受けて三島市内の飲食店が特別なメニューを一つ出すとか、その絵本をお店に置いておくとか、というようなことをやっても面白い。

事務局：学校給食では、絵本に因んだメニュー（ジブリなど）を栄養士が考えて出す日もある。そこを、地域の飲食店ともいただいたご意見のような協力ができるといい。

委員：出版物では絵本にでてくる料理を再現するという本が何冊も出ている。

委員に紹介いただいたリアルな企業や飲食店と立体的に発展していくことが重要。どうしても、図書館という狭い範囲で考えるとどうしても狭くなる。それをあらゆる方たちと協力していく、外に広げていくと新しい展開で、PRしてくれる口も増えるし、予算をつけていただいて頑張っていたきたい。

今日は、図書館というか、言葉というか、絵本にも貴重なご意見をいただいた。大岡信さんにちなんだ三島ならではの皆さんが大事にされていることをさらに深めて広めていくことが重要だと思う。イギリスのある町が本のまちといわれている、本の王国と言われているところ、ここの取組も海外の事例となるが参考にしてもいい。神保町のような、ああいうまちが三島で、絵本でできてくると拡がりができるし、図書館と古本屋と新刊本屋が有機的につながっていけるかということが子ども達の経験につながっていくと思う。

4 閉会